

第52回 日文研フォーラム



日本近代知識人の思想と実践

— 有島武郎の場合 —

The Thought and Practice of Modern Japanese Intellectuals:

The Case of Arishima Takeo (1878-1923)



金 春 美

Kim Choon Mie

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

近代日本知識人の思想と実践

ー有島武郎の場合ー

The Thought and Practice of Modern Japanese Intellectuals:

The Case of Arishima Takeo (1878-1923)

● 発表者 ●

金 春 美

Kim Choon Mie



発表者紹介

金 春 美

Kim Choon Mie

高麗大学文科大日文科教授

1943年生まれ。1965年、梨花女子大学英文科卒業。1977年、韓国外国語大学大学院日本語科専攻修士号、1984年、高麗大学大学院国文科博士課程専攻、博士号を取得。1979～1985年、韓国外語大日語科助教授。1983～1984年、東京大学比較文化・文学研究室客員教授。1984年、韓国外語大大学院日語科主任。1985年～1989年、高麗大学日文科副教授を経て、高麗大学日文学科科長。1989年より高麗大学日文科教授として現在に到る。1992年8月より1993年8月まで国際日本文化研究センター外国人来訪研究員として来日。専門分野は韓国・日本近代文学の比較研究。

主な論文及び著作

- 「谷崎潤一郎論」1977年、韓国外国語大学院。
- 「翻訳詩の意味〈上田敏の『海潮音』と金億の『奥惱の舞踏』を中心に〉」1979年、比較文学（韓国比較文学会）
- 「谷崎潤一郎の世界」1982年、世界文学夏号
- 「金 東仁の美意識」1979年、『金 東仁研究』所収（Semun 社）
- 「韓国近代文学史上にみる明治学院」1985年、明治学院図書館資料（明治学院大学）
- 「20世紀日本文学の思想論争」1986年、弘益（弘益大学）
- 「日本文学の現住所」1986年、東洋文学
- 「カトリック作家としての遠藤周作」1988年、東西文学
- 「日本の私小説」1988年、東西文学
- 「有島武郎論(1)〈一知識人の自己模索〉」1988年、高麗大学人文論集
- 「有島武郎論(2)〈文学とキリスト教〉」1989年、東西文学
- 「日本耽美主義文学の系譜」1989年、外国文学
- 「宮本百合子の『伸子』」1990年、文学思想
- 「村上春樹論」1991年、現代文学
- 「私小説への回帰〈開高健を中心に〉」1992年、文学思想
- 「日本の映像世代と文化」1992年、文化・芸術（韓国文化振興院）
- 「金 東仁研究」1985年、（高麗大学民族文化研究叢書25、高麗大学出版社）

翻訳

- 村上春樹『風の歌を聴け』1991年、(Moum社)
- 村上春樹『中国行きのスロー・ボート』1992年 (Moum社)
- 開高健『掌の中の海』etc. 1992年、(文学思想社)

はじめに

今日は近代日本知識人のあり方について、有島武郎を中心に話したいと存じます。なぜ今有島であり、もうその単語が国語辞典にしか残っていないものとかえ思われる知識人などという時代錯誤的な話しなのかと思われるのではないでしようか。それで前置きが少し長くなるかも知れませんが、まず私がこのテーマに関心を持つようになった契機から話させていただきたいと存じます。皆様もご存知かと思いますが、五、六年前の韓国は全斗煥(Jyon Doo Han)大統領の軍事政権に対する全学連の反体制運動の渦中にありました。このような闘争は朴正熙大統領の時から引き続いていたものでしたが、キャンパスでは、反体制派の学生の焼身自殺、投身自殺が相次ぎ、学生を支持する先生方は拘留されるなどの激動期でありました。当時私は丁度学科長をやっておりまして、学生達と堂々めぐりの、結局平行線に終わってしまう話し合いを何時間もつづけたりして、私なりに苦しんでいたのです。金芝河という反体制派詩人は「焼身自殺などするな。それは犬死だ。」と言うような事を言って反体制派から批判にさらされましたけれど、学生たちの論理に非現実的な面もあって、私としては妥協できない部分も多い。しかし、同時に妥当な主張である事も否定できないということで、自己ディ

レンマに陥っていたのです。金東圭高麗大学教授は「今日韓国の知識人の正しい位置はどこであり、どこであるべきか。韓国現代史上、今ほど知識人たちが孤独で、脆弱であり、結局自己幻滅を覚えざるを得ない時はなかっただろう。」と一九八八年六月十八日付の東亜日報に書いておりますが、そういう激動期を経たのです。と言うわけで、七〇余年前の日本という異国での文学者のあり方ではありましたが、激動期を生き、思想と実践という問題にぶつかって悩んだ有島武郎の存在が身近に感じられたのでした。その後、幸いに韓国も徐々にではありますが、民主化のプロセスを辿り始め、学生運動も下火になり、先月には全学連の自発的解体宣言という段階に至りまして、私ものんびりと、「谷崎潤一郎に於ける桃源境志向」などという優雅なテーマにとりかかったりしておりましたが、どうも最近、といっても実は日文研に来訪研究員として来日して二、三ヶ月ほど経った去年の十二月頃から、改めて有島武郎の言う思想と実践の問題が気になり始めたのです。何故今さら有島か、とのご質問に対する答になるのではないかと思われる記事が先月朝日新聞にでておりましたので、ちょっと引用させていただきたいと存じます。これは東大の小森陽一さんが「世紀末、読み直される漱石」という題で書かれたものですから、有島に該当させるのは少々強引に過ぎるかなとも思われるの

ですが・・・「漱石の小説も、文明批評も、文学批評も、すべて現代の問題であることを実感した。あるいはその言葉と認識を、先入観を捨ててその文字どおりの意味に於いて捕らえる事に依って、二〇世紀末の最も重要な課題が見えてくることを確信した。(中略) 漱石を生きる、ということは、産業資本主義と科学文明、近代の国民国家と戦争、メディアと政治、言語と文学、そしてその中で生き死にする近代の個人について一気になおかつトータルに、原理的に考えるという事にはかならない。」少なくとも私にはここでの漱石を有島に読み変えてもいいのではないかと思われるのです。もう少し詳しく説明させていただきますと、私は今日本語でしゃべっています。しかもかなり日本語ができる、と思われるのではないのでしょうか。ところが、日本語で日本の方に話しながら私自身は何かコミュニケーションがとれていない、言おうとしてしていることが意図通りに伝わらないと言う思いが非常に強く感じられないのです。私は一〇年前にも東大に客員研究員として一年間お世話になったのですが、その時は今のようなズレは感じなかった。一〇年の間に日本はより豊かになり、経済大国としてグローバルな影響力を及ぼすようになった。日本の方々も、特に若い世代は、国境意識を持たないくらい国際化している。それなのに私は宇宙から迷い込んできたE・Tのよ

うな違和感を払拭できずにいる。それが第一の問題です。一昨年私は村上春樹の「風の歌を聴け」を翻訳したのですが、主人公の△私▽に小指のない女の子が、「本当のことを聞きたい?」と言って、一週間前にデートを断ったのは実は墮胎手術のためだったと言う話を話そうとした時、△私▽は「去年ね、牛を解剖したんだ。腹を裂いてみると、胃の中にはひとつかみの草しか入っていなかった。僕はその草をビニールの袋に入れて家に持って帰り、机の上に置いた。それでね、何か嫌なことがある度にその草の塊を眺めてこんな風に考える事にしてるんだ。何故牛はこんなまざうで惨めな物を何度も何度も大事そうに反すうして食べるんだらうってね。」「分かった。何にも言わないから。」と女の子は言いますが、彼女はそういう彼を優しい、と受け止めています。つまり他人の内面世界に踏み込まない、僕の世界にも干渉しないでほしい。という、一定の距離を保つ事が△優しさ▽になっているのです。最近よく聞かれる Professional Kids（機械マニアの子供達）と呼ばれる、幼児期からハイテクの世界に慣れている子供達は情報過剰の社会を生き、小学校三、四年生のほうが文明批評においてはむしろ担任の先生より優れているかも知れない。しかし、彼らは縦横のつながりが全く無い、個の存在として人間より情報が先行している世界に住んでいる。しかもそれが当然になっ

ている。対話というものの必要を感じないくらい、彼らの個人的空間はまとまっている。優しさ、思いやりという言葉がスローガン化してしまって、やたら目につく町の中で、そもそも他の人と分け合う共通の関心事項というものが行方不明になってしまったのではないかという気がするのです。日本の若い女性が結婚相手に望む条件の一つである優しさの語源は「身も細くなるくらい他人のために思い煩う」ことではなかったのでしょうか。（山上憶良「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」、「貧困問答」万葉集 卷五、八九三 岩波書店「日本古典文学大系」の注には「やさしの語源は瘦ス↓ヤサシ→瘦せるような気がする。世間に対してつらくて、身も細るように感じる」とある。）話が少し飛躍しますが、もしも日本が本当に他人に対する優しさ、思いやりというものを根底に据えて経済援助をするなら、（貿易黒字が多すぎて、しかもそれは日本製品が優秀だからなのに、とにかくうるさい。見返りとしてお金を出そう、等という事はないでしょうが）、実質的に出している金額に見合った評価を受けられるのではないだろうか、などと考えていますと、「私の意味する積極的な生活というのは、他の人と連関して考えられねばならぬ生活を言うのだ。多くの人が苦しんで生活しているのに、自分だけが楽な生活ができるということは一つの矛盾だ。」

「生活ということ」一九一一年十一月）と言い、貧困などの社会問題は「連帯責任の理として覚醒したものの双肩にある。」（一八九八年十二月三十一日、日記）との認識下に、「思想は一つの実行である。私はそれを忘れてはいない。」（「惜しみなく愛は奪う」一九一七年六月）という信念を貫いた有島の存在が、改めてクローズ・アップされて来たのです。ここで取りあげる余裕はないのですが、このような有島の「富」に対する姿勢は、いま話題の「清貧の思想」につながるものだったと言えます。これは大正十一—十二年間の彼の書簡、特に友人の足助素一、弟の生馬宛のものと、その日記に詳しいですから、興味がある方は読んで下さい。

二番目はこれは長い間、ことに韓国と比較して私が関心をもってきた問題なのですが、近代日本の知識人の役割に関するものです。三年前に開かれた日文研の国際シンポジウムでシンガポールからいらっしゃった容応莢さんは「アジアにおける日本」というテーマで発表した論文で、日本の知識人の個人の世界、私的世界への沈潜、つまり非政治的、超政治的な姿勢がどういう意味を持つか、と言う問題を取りあげました。容さんは北村透谷、与謝野晶子に限定しましたが、反政治的・非政治的な態度をとり、私的世界に没頭しているはずのものが、結局は直接的、間接的に日本の軍国主義に加担する事になり、無関心・無批判であった結

果、戦争に関与する事になったと指摘しています。小田実は「日本の知識人」（筑摩書房、一九八五年）で知識人を三つのタイプに分けて、(一)、専門知識の持主、(二)、批判的知性の持主、(三)、文化人と同じ意味の言葉として、精神的創造、伝達に携わる人（久野収の分類による）と整理していますが、西洋人が知識人の理想像として批判的精神の持主を持っているのに対し、日本人にはそういう理想像がない。そして知識の蓄積さえあれば（たとえば単に大学卒とか・・・あればできた青年だ。一高、東大をトップで出たそうだから、うちの次女の婿に・・・などという発想）知識人と認められる日本の現状とそのような認識が、経済発展にはプラスとして作用したと分析しています。ただし、それが必ずしも望ましいものだとは結論づけてはいません。モーリス・パンゲは「自死の日本史」（筑摩書房、一九八六年）の中で「日本人の超自我は身近なものに対する具体的な責任感に結び付けられているため、自分から遠いものの要請に対しては西欧的超自我ほどには開かれていないし、そのために単なる社会的義務をもって至上の義務であると考えて何の疑いも抱かなかったのである。ヨーロッパにおいてかつては永遠の生と永遠なる神を思念することが義務であったし、今はまた人類と宇宙のことを考えることが義務とされているのとそれは対比的である。」そして、「根底から解体、再構築すべき

は、ちょうど明治維新のときにそうであったように生のあり方であり、生に結びついた価値であるということになる。」と言っていますが、だからこそ今、有島における思想と実践の問題、そして知識人のあり方に対する苦悩が見直されなくてはならないのではないかと思つた訳です。

一、有島武郎における思想と実践

日本近代文学史上、時代状況との対決に敗れて自分の存在を否定せざるを得なくなり、自殺を選択した文学者の系譜、例えば、北村透谷（一八六八年十二月二九日―一八九四年五月十六日）、有島武郎（一八七八年三月四日―一九二三年六月九日）、芥川龍之介（一八九二年三月一日―一九二九年七月二四日）、太宰治（一九〇九年六月十九日―一九四八年六月十三日）、三島由起夫（一九二五年一月十四日―一九七〇年十一月二五日）などは、それぞれ思想と実践、狭義には文学と思想の問題にぶつかった存在だったと言えます。生を終結する方法としての自殺の選択が肯定できるものか、できないものかという問題は別として、彼らが直面せざるを得なかった知識人としての役割に対する葛藤と懷疑は時空を超越して一部の文学者に切実な問題になってきたと言えます。サルトルがこの問題にぶつかり、アン

ドレ・ジード、マルロー、ラモン・フェルナンデスらの行動主義文学論、日本プロレタリア文学運動などもこの問題につながるものと言えるでしょう。話を有島だけに限定しますと「ヨーロッパの近代文学に於いてはむしろ当然のことだった自我への誠実と社会への誠実の結合と言う事が、特殊の条件に災いされて容易に果たされなかった日本の文学的風土の中で、その結合を果たす事を明白な課題として選んだ稀な存在」と安川定男が規定した（『有島武郎論』明治書院、一九七八年）一作家に対しての関心といえます。有島が大正期の一時期、最も多く読者を有する（増田篤夫「有島武郎論」大正八年八月）人気作家であったこと、人妻波多野秋子との情死という最後のため「将来に対する唯ぼんやりした不安」（芥川龍之介「ある旧友へ送る手記」一九二七年七月遺稿）と言って自殺した芥川に比べて相対的に低く評価されてきたこと、戦後の荒廃した精神的風土の中で、△時代の良心▽、△自我の誠実完成への旅路▽などの名の下に『近代文学』派の評論家たちによる再評価が行われたこと、そして今、知的水準が高まった、総知識人化、あるいは総大衆化した日本の現時点に於いて、“密接なつながりを、我々の人生とはもはや持ち得なくなっているようにも思われる”と石丸晶子がいうように（『有島武郎・生命主義の形成と挫折』『早稲田文学』一九九三年二月）忘却のかな

たに追い払われた存在になっていくのかも知れない現状、などについては今日は省略させていただきます。しかし、これは一九五四年の著作ではありますが、本田秋五は「白樺派の文学」でこう言っています。「武者小路や志賀は、思想を投げ捨てることによって自己を生かした。有島は思想を背負ってよろめき、ついに倒れた。僕は誰に学び、どのように生きたいのか？これは僕が自分にさし向けねばならぬ問である。」

有島の一生は知識人の役割、あるいは恵まれた者の義務とその *raison d'être*（存在理由）の模索に貫かれていました。思想に絶対的な *priority* を置く倫理的な人間が、実生活も思想に従属させようとする実践的な *moralist* である時、その人は悲劇的な存在にならざるをえないのか。その限界と挫折は克服できるものであるか、などの問題をも一九二二年の狩太農場解放と「宣言一つ」（一九二二年一月）を中心に考えて行きたいと存じます。

有島は一八七八年三月四日薩摩藩出身の有島武と幸の間の五男二女の長男として生まれました。武が官吏としても実業家としても成功した人であったことは有島が恵まれた環境に育ったことを意味します。幼時から外国人に英語教育を受け、学習院在学中は大正天皇の遊び友達に選ばれ、札幌農学校卒業後は（一九〇三—

一九〇六年、Haverford College, Harvard Graduate School) アメリカに留学し、一九〇六年九月一日から約半年間(一九〇七年四月一日神戸着)帰国ついでにヨーロッパを旅行し、この時ロンドン郊外にクロボトキンを訪れています。帰国後札幌農学校に教授として赴任、結婚、そして『白樺』を通しての作家生活、しかもさつき申し上げましたように、彼は一九一七年頃から人気作家でした。外面的にみて、彼ほど恵まれた環境にあった人は当時としては珍しいと言えましょう。彼の自伝的な事項は皆様もよくご存知の事と思われまので、ここでは「思想と実践」という面に関わるものだけを取りあげたいと存じます。

有島は札幌農学校在学中、キリスト教に入信しています。一九〇四年、アメリカ留学中、キリスト教に対する懷疑に捕らわれ、徐々に離教が始まったのはその日記に詳しいのですが、例えばこの時点から祈祷の回数が顕著に減り、一九〇五年六月十二日の日記には“Christ is God because he believes so.”などの言葉が見えます。しかし彼が正式に札幌独立教会に退会届を出したのは一九一〇年でした。有島が誰よりも誠実に神を求めた人であったことは事実ですし、「清教徒のような清い生活をし、聖書を食とし、祈祷を糧とした・・・しかし怠惰と性欲とはやむ時無く私の刺となって、私が外面的に清い生活を営む程に私を苦しめ始めた。」

（『リビンググストン伝』の序）としているのはその潔白性の現れと受け止められます。しかし彼が魅かれたのが救世主としてのイエスというより、愛と思想の実践者としてのイエスであったことはその離教を予見させるものであったと言えます。罪の観念に苦しむ森本厚吉と違って、始めから有島はキリストの愛の心にのみ引かれたと言っています。（『リビンググストン伝』の序）「いよいよ身に染みて覚ゆるは義と愛と献身とを人の子に教えていきし年若き導師の面影に候。」彼に従う生でなければ「この世の全ての物与うらるとも満足はできないだろう」と有島は一九〇四年七月十四日付けの家族宛の手紙に書いていますが、同時に彼にとつてキリストは「常に彼が住める時代の最も重要な問題を自己において解決した人」、「神の宮の神聖を保つために鞭をもって商人を追い出し、民衆の欲求と異なった道を歩いていたパリサイ、サドカイの徒に手痛い攻撃を与え、形式に流れていた宗教上の慣習に徹底的な反逆をした」（「静思を読んで倉田氏に」一九二二年十一月十二日）実践の人であり、「人類の罪惡は人類全体の連帶責任であることを明らかにした人」（一九〇二年十二月三十一日、日記）でもあったのです。入信前、遠友夜学校教師時代、すでに彼は同情と共感の問題にぶつかっています。「困難に会わざるものは、他人に与するの sympathy 決して大なるを得ず。」という大島伝導士の

言葉に有島は今まで困難というものを殆ど経ていない自身は sympathy が足りない
と悩んでいます。しかもそれは「人間にして真の sympathy なきものは殆ど人間に
あらず。」という厳しい信念に基づいていたのです。(一八九八年四月二四日、日
記)

父、武が農学校に進学した息子の将来に備えて準備してくれた狩太農場の小作人
たちの悲惨な境遇、遠友夜学校で接するようになった疎外された階層の実状など
は彼には衝撃でした。「小作人とは実に憐れむべき存在なり。余は彼らの丁寧に余
に礼するをみて殆ど逃げんとするに至りぬ。同じく是人、しかして一は彼の如く、
一はこの如くなる所以は何ぞや。是人類最終の理想ならんや。余らと彼ら相共に
住むべく世は造られたり。相隔てて住むべきにはあらざるなり。」(一九〇三年六
月二五日、日記)すでにここには社会制度の不条理に目覚めた視線が見えます。新
渡戸稲造教授が講義する Carlyle の “Sartor Resartus” は彼によりはっきりと社会
に対する責任というものが実践を通して具現されるべきものであるとの認識をも
たらしています。「Carlyle の言ったように “The end of man is an action, and not
a thought” だ。」(一九〇三年二月十六日、日記)一九〇五年アメリカ留学中、金
子喜一を通して接するようになった社会主義に対する共鳴は「実際方面に於いて

少数者の手から幸福を多数者に分かつたためには社会主義が主張されるのが当然だ」との認識につながり、一方キリスト教は「その教える倫理は耳にすべく美しい。しかしその実行ということになると不可能事が要求されているのではないか。財産問題にしろ如何にその処分に精神的な要求を強いたとしても、そうなると思うのは無理だ。・・今行われているキリスト教ならば、——そして信仰ある人々はそうだと断言している——私はその信徒たることを考え直さねばならない。キリストは財産の私有を厳禁しておられたと私には思われる。キリストによく似た聖フランシスコの実行しようとした所もそうであったと私には見える。もしそうだとすると、私はキリスト信徒の名簿から自分の名を除かねばならぬ。」（『リビングストン伝』の序）一九一九年九月）同じ文中、有島は「低能でも何でも自分の仕事で喰うような境遇に身を置かなければ私は自分自身にすまない。」とも言っています。キリスト教入信の体験は彼に生涯二元論的葛藤を抱かせましたが、なによりも大きな痕跡は神のいう正義と愛の実践というテーゼだったと言えます。彼の「聖書を読む度に恥面に満つ。ああ、しかり。信仰もし行を兼ねざれば死ぬるなり。」（一九〇三年七月二二日）「神は如何に思うべきやを教え給えり。されど如何に行ふべきかに至りては、まだ教示を残し置き給えるが如し。」（一九〇三年七月四日）

「我も幸いにして涙の中にも実行の生涯を送り、実行の *model* を堅く神に置かんとするの決心をなし得るに至り。」（一九〇一年四月二一日、日記）などの言葉は有島が信仰に何を求めていたかを表すものでしょう。内村鑑三に対する敬愛心も内村が「満腔の熱心と至大なる同情」を持つ「実行の人」であるからであって、その思想ではないと彼は言い切っています。（一八九七年七月十五日）アメリカ留学の相談に信仰上の師、内村を訪ねた有島に内村はカーライルは、エマーソンやトルストイと同じく正統的な信仰の持主ではない。彼らの見解に同意するのは人間を孤独に導くものだと言いますが、有島は「氏の語る所切々として肺腑をつく所あり」としながらも「遺憾ながらその持説には賛成の意を表す能わざるものなり。」（一九〇三年七月二二日、日記）だったのです。有島自身「私の持っている善根は・・もしあるとすれば、それは生まれたときから持っていたその俚の善根だった。何物もつけ加えられてはいなかった。キリストの言行から倫理の鞭撻を受けて自分の生活が向上しているのを悪いというのではないが、それだけでは信仰の人と言う事は出来ぬ。キリストの言行が生み出されたその力の源に私も冥合するのなければひっきょう全ての事は徒事だ。」（『リビングストーン伝』の序）と言っています。結局、有島がキリスト教に見いだしたものはイエスの償罪が欠落した善行

であり、そのような善行に対する道徳的、倫理的責任感だったのでないでしょう。ある意味では彼が追求していたものは始終一貫同じものだったのですが、その道程でキリスト教、社会主義などとの一時的な遭遇があったのだったと言っているのではないかと思われます。有島のこのような立脚点から「宣言一つ」と私有財産放棄への道はそれほど遠くないでしょう。

二、「宣言一つ」と狩太農場解放

ヒューマニズムに基礎を置く個人の完璧な自由が保障され、これは自由意志による選択の保障とも言い替えられますが、（有島は往々これを本能生活と表現しています。）公平な富の分配による正義社会具現を希求していた有島が堺利彦をして「穩健な人道主義者が企図した絶望的逃避の宣言」に過ぎないと論評させた（「有島武郎氏の絶望の宣言」一九二二年二月『前衛』）「宣言一つ」（一九二二年一月『改造』）に到るようになったのは、当時の時代状況からみてある意味では必然的な趨勢だったとも言えます。

「思想と実生活とが融合した、そこから生ずる現象として最近日本に於いて、最も注意せらるべきものは、社会問題の問題として、また解決としての運動が、

いわゆる学者もしくは思想家の手を離れて、労働者そのものの手に移ろうと一つあることだ。」と始まるこの文で有島が主張しているのは「自分達の運命を、自分達の生活とは異なった生活をしながらこれ言う人々の手に託する習慣を破ろうとしている。少なくともさい疑の眼を向ける」労働者階級の知識人排斥の動きの台頭、そしてそれは必然的なものだとの認識。そして第四階級出身でない自分は彼らとは無縁の衆生の一人であり、その一人になることが絶対に出来ないから、ならせて貰おうともしないと言う自己限定。「今後私の生活がどのように変わろうと、私は結局在来の支配階級の所産に相違ないことは、黒人種がいくら石鹸で洗い立てられても、黒人種たるを失わないのと同じようだ」との階級移行の不可能性の再認識。だから自分にできることは第四階級以外の人々に訴えることしかない。との論旨に要約できます。しかもこのような認識は「ブルジョアは必ず消滅して、プロレタリアの生活、文化が新たに起こらなければならぬと考えている者だ。」（「返信」一九二二年三月）という考えが前提になっているのです。有島は「自分と自分の仕事を自分で明らかにしておく必要からあんなことを書く気になりました。多少他人にまであたるようなことを言ったのはこの頃の中央文壇の空気の中に私としては好ましく思われない流行思想かぶれの議論を聞くのが生意

気ながら気に喰わなかったからです。」と河上肇に言っていますが、（一九二二年十二月十九日付書簡）予想外の一大論争を巻き起こし、結論的に言えば、「堺老はあの感想は誰にも賛成されないと云う特色を持つと評しました。」（八木善次宛書簡、一九二二年一月二九日付）と有島が書いている通り、殆どが批判的でした。彼の潔癖症が結論づけた知識人無用論、必滅論はマルクスやクロポトキンまで必要だとの論理に飛躍し、その役割を否定された同伴者の知識人の非難の対象になり、同時に労働者階級からは滅亡に瀕したインテリゲンチヤの敗北の宣言と受け止められたのでした。ブルジョア階級の滅亡が必然的であり、それが人類により普遍的な平等社会をもたらすであろうとの有島の予見が多角的な面に於いて実現されなかったことを私たちは知っています。そして少なくとも有島の論旨は絶望の宣言にとどまらず、知識人の *raison d'être*（存在理由）の積極的な模索にまでいたらなければならなかったのではないのでしょうか。いくら「本当に労働者の気持ちの分かる者は労働者において外にない。もう指導者に手を引いて貰わなくても自分達の運動は自分達の力でやれるという自信もできた。」（吉田一「労働運動の分派」、『労働運動』一九二一年四月）という発言や、当時の現状が「明治以来の小市民的な文壇文学に対しては、ブルジョア文学と規定してしまうことで敵にまわ

し、農民主義的な農民作家にたいしてもこれを反動的と規定、攻撃し・・・無政府主義者やヒューマニストに対しても否定的ないし拒否的な態度が」一般的だった、知識人に厳しかった状況を（小田切秀雄「日本近代の社会機構と文学」法政大学出版局、一九七〇年）考慮に入れても、であります。同情と共鳴の原理でその生活を貫こうとした有島はこうして自己否定へ到達します。しかもこのような絶望は一九二二年七月十八日の狩太農場の無償解放の決行という、彼が長い間希求してきた私有財産の重荷からの解放によっても（不完全なものではありませんが）、治癒できない位深刻なものだったのです。「アメリカにいる時クロボトキンの著作などに親しんだ事から物の所有と言う事に疑問を持つようになった」有島は「親の財産で不自由なく勉強してきたが、ずっと心理的には圧迫を感じていた。父の生存中には父を悲しませるかと思って黙っていたが、父も亡くなり、なによりしたくてせすには居られなくなったので、そして文学という自分の仕事をみつけ、その仕事に妨げになるものはすべて捨てたくて、もう一つは農民の状態を見ると、どうしてもこのままにしては置けない。それから生産の機関は私有にすべきではない。それは公有もしくは共有であるべきだ。」（「農場解放の顛末」一九二三年四月）という考えからその思想の実践に踏み切ったわけですが、その後有島は「あら

ん限りの物を投げうっても、なお僕には非常に有利な環境のもとに永年かかって植え込まれた知識と思想がある。外見はいかにも無一文の無産者であっても、僕の内部には現在の生活手段としてすこぶる都合のよい武器が潜んでいる。これは僕が失おうとしても到底失う事のできないものだ。」（「返信」一九二二年三月）

「私は私の属してきた民衆の文化を継承することの無益をしみじみと知った。私は従来の生活の延長が破滅の深淵へのひた走りに過ぎないのを痛感する。私の生活は崩れて行かなければならぬ。」（「文化の末路」一九二三年一月）という悲観論に陥って行ったのです。このような悲観的な考えは「即実」（一九二二年十月）に見えるように当時の日本の実状とからまってより絶望的となり、死への沈潜を促しているのが分かります。「国家は小学読本からずっと社会奉仕を教え込み、そして奉仕の報酬を受けてはならないと教え込んでおきながら、三〇年勤続とか四〇年勤続とか言って、教え込ます道具の先生達に杯をやったりしています。ここに国家自体のデレンマがあり手品がありはせぬか、と思うのです。植民地があり、資本金がこれに眼をつけ、宣戦をさせて社会奉仕によって人民を引きだそうとし、その裏に廻って甘い汁を吸っている事実。何という事でしょう。この時に当たって私は何の指針に依って進んだらいいのか。社会奉仕をすすめ、その報酬を貰っ

てはいけないという国家。そして資本家の眼をつけた植民地に社会奉仕でどんどん戦地に向けて出発する多くの民衆。と考えると私はやっぱり自分自身の内部に潜り込まなければならなくなるのです。そして死です。死を凝視するのです。神経の少しばかり鋭い人々は我々が生きる路においてどうかしなければ生きられない事を知り、どうかして自分の生きていく路のまっすぐであることを望むであります。」（愛知県立第一高等女学校における講演）

彼が波多野秋子という死の賛美者に出会わなかったとしても、死の一月前に書かれた「独断者の会話」（一九二三年六月）に見える絶望の深淵は有島をして死に赴かせたではないかとの推測を可能にするのではないのでしょうか。

三、結論

有島の観念論的な思惟、一方的に流れる気質を純粹という言葉で擁護する気はありませんが、彼が経た知識人としての存在論と挫折は克服不可能なものなのでしょう。この問題に関連してジャン・ポール・サルトルの生涯は示唆するところが多いようですので、少々考えてみたいと思います。これは前述しました安川定男氏の「有島武郎論」に触発されて考え始めたことであることをお断りしてお

きます。第二次大戦の時、砲兵隊所属の氣象班の一員として動員されたサルトルは一九四〇年の二月、休暇でパリに來たとき、今後は政治の動きから遠ざかるようなことはしないと決心しています。この世界に意味を与えるのは行動を通してであり、思弁より実践が先行すべきであるとの意志表明だと言えます。（一九六四年ル・モンド紙とのインタビューでは、二十億の飢えた人が地上にいる現在、文学に専念するのは自分を欺く事だとも言っています。）彼はブルジョア出身である自分は第四階級への移行が不可能だと認めています。（「文学とは何か Situation 2」加藤周一、白井健三郎訳「サルトル全集 9」人文書院、一九五四年）ここまでは有島と同じなのですが、サルトルは一歩進めて知識人の役割として、(一)、労働者の内部から知識の専門家が育成されるように助け、(二)、労働者内部にブルジョアのイデオロギーが生まれるのを阻止し、(三)、労働者階級の究極の目的としての普遍化を示し、(四)、知識人自身の目的である知識の普遍性、思想の自由、真理を守るために「一切の権力に対抗して」闘うことをあげています。つまり反省的自覚を具体的に行動化すること、と言えるでしょう。彼が孤独な存在であったのは否定できない事実ですが、それにもかかわらず、その生涯は思想と生が統合されているいい例になりうるのではないのでしょうか。行動主義文学論を提唱したマル

ロー、ラモン・フェルナンデスなどの「もしインテリゲンチヤが自己を救済しようとするならば、それは行動のうちに避難しなければならぬ。」「何よりもまず行為によって、そして行動のうちに」(小松清「行動主義文学論」紀伊国屋、一九二五年)という言葉も想起されますが、河上肇は「宣言一つ」に触発されて書いた「個人主義者と社会主義者」(『改造』一九二二年五月)で「このような時代に我々は退いて自己を培うことに専心すべきであるか？ 又たとひ僅かなりとも既に得たる知識を分配する事に力を致すべきであるか？ 恐らくこれは人の氣質が、最後の断定をなすべき問題でもあるだろう。」と言っています。それはそうなのですが、外から日本を見ている外国人の一人として私はやはり思想と実践が結合された、人類と宇宙を視野に入れた批判的知識人が日本に増大されることを望んでやまないものです。

発表を終えて

論文や発表のテーマを決めようとする時、いつも同じ問題にぶつかります。T.P.O.に合うcurrentlyなissueをとりあげるべきか、自分の関心のある分野に閉じ込めるべきかという問題です。

1993年の4月という時点での優雅で美しい古都京都に「知識人の役割」という重いテーマがふさわしいかどうか。1年間ではありましたが京都に住むようになって、この美しい古都が芥川龍之介の言葉を借りれば、“もはや路傍の存在”ではない、身近なものと感じられるようになっていたのでテーマの選択がもっと難しかったのかも知れません。でも結局関心分野をとることにしました。それが路傍の存在ではありえなくなった人々との関わり方であるべきではないかとも思われたからです。

幸いにも聴衆の皆様が関心をもって下さったようでしたので嬉しゅうございました。

紙面を借りてフォーラムのために御尽力下さった臼井専門官とコメンテーターを担当して下さいました山折先生に御礼申し上げます。

Choon Mie Kim

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがいがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
49	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

51	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリーア美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
52	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 ー科学制度をめぐってー」
55	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り ー平安朝文学の特質ー」
56	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」

○は報告書既刊

発行日 1993年10月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1993 国際日本文化研究センター

■ 日時

1993年4月13日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

